

風景に入る

— 子どもの知覚から大人の風景体験を考える —

21919032 土井 絵理香
指導教員 宮 晶子 教授

原風景 子ども 身体
地と図 路地 都市の多様性

1 制作の背景と目的

子どもは、大人の目には何も反応しないところでも身の回りの様々なものに興味を示す。私は幼いころ多くの時間を公園の裏山や、河辺、道端、市民施設などのまちなかで過ごし、未知の世界に胸が高鳴っていた。しかし、大人になるにつれて都市に対して驚きや発見、身体感覚を伴うワクワク感を得ることは少なくなった。誰もが子どものころに感じていた環境への興味を、大人になると感じられなくなるのはなぜだろうか。

このような疑問を背景に、本制作では幼少期と大人の環境の捉え方を比較し見えてきたことを根拠に、大人も子どものように驚きや発見的な身体を経験を得る空間を提案したい。

2 子どもと大人の見ている環境の違い

2-1 ピアジェによる認知構造の発達段階

20 世紀スイスの心理学者ジャン・ピアジェは、生まれたばかりの乳児は「活動」を通じて認知構造を構成してゆくと指摘する。個人差があるが、主に 8 歳以下の子どもは空間を自らの身体との関係や事物同士の関係づけによって認識しているが、論理的思考の能力と知識をもつ大人になるにつれて、空間を座標的に認識し事物を対象化ようになる。

2-2 子どもの見ている環境

図 1 のように、子どもはモノそれ自体と自己の直接的な感覚器官との関わりから、自己中心的に広がる身体的なものとして環境を捉える。事物は絶対的な対象ではなく、周辺との関係でその境界は変化し、対象化される風景はなく自らが絶えず「風景の中にいる」といえる。

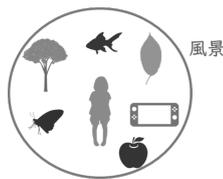


図 1 子どもの見ている環境

2-3 大人の見ている環境

図 2 のように、大人はあらゆる環境を対象化して見ており、大人にとって見るべきものは自分と切り離された対象として存在する。

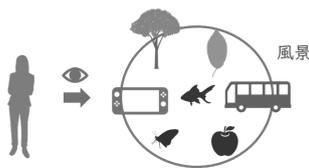


図 2 大人の見ている環境

対象の全体を把握しようとする大人は、絶えず「風景を見ている」状態であるといえる。

3 風景に入る

3-1 風景に入るとは

ここにおいて、大人が「風景の中にいる」状態になることを「風景に入る」と定義し、風景に入ることを誘発する空間を「風景に入る空間」と呼ぶことにする。知識と経験を得ることで環境を対象化するようになった大人が「風景に入る」ためにはどのような条件が必要であり、どのような意義をもつか明らかにすることが本制作の目的である。

3-1-1 幼少期の原風景 — 風景の中にいる —

子どもが「風景の中にいる」ことの例として、原風景がある。原風景は図 3 のように多様な身体記憶の有機的な総体として表せる。このことは、バラバラなものごとの集まりが「木」や「たき火」そのものを対象化したものではない風景として記憶に残っていることを表している。

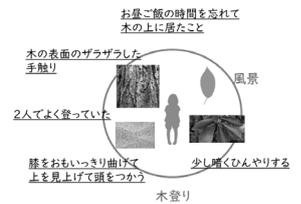


図 3 原風景のイメージ図

3-1-2 路地の経験 — 風景に入る —

大人が「風景に入る空間」について述べる。路地は私にとって「風景に入る空間」であり、そこに身を置くと、私は小さな発見や驚きを通して環境と私が繋がってゆく心地よさを覚える。路地を歩く時、図 4 のように、私の視点はある一点を眺めるのではなく速度をもって様々な点から点へと移動し、見えたものとの関係が私の中に生まれている。

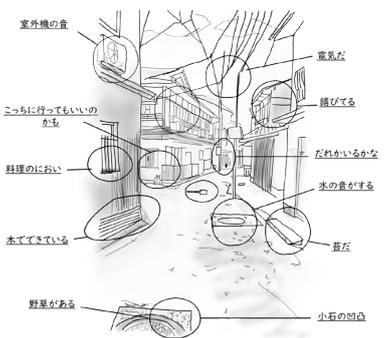


図 4 路地を歩くときの視点

3-2 風景に入ることの特性と大人にとっての意義

大人は、無意識のうちに合理的思考に支配されて環境を知識的・思想的に見るようになり、風景を「眺めて」いる。「風景に入る」ことの特性は、複数の身体感覚によって他者や様々な事物、環境自体に自分を関係づけることである。大人にとってこのような「風景に入る」意義は、都市を眺め、見せられるだけの受容する個体から、風景の中で自分と不可分な関係として都市を感じることで、都市に関わる人として主体的な行動や思考を起すことである。

4 風景に入るために—空間を構成する手法—

4-1 実空間における「風景に入る空間」の比較

現代の合理的な都市空間と私が「風景に入る」経験をした空間を比較する。図5・6のように写真を構成要素のスケール別に色分けすると、現代の合理的な都市空間は要素の数が少なく、水平・垂直で平滑な広い面が空間の多くを占めているのに対し、「風景に入る空間」は2000mm以下のスケールが歩行空間を囲んでいることが分かった。

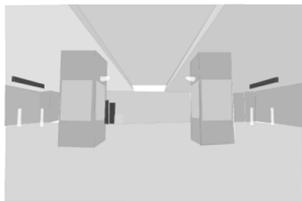


図5 現代の合理的な都市空間



図6 風景に入る空間

4-2 空間を構成するスケール —近距離—

視線を誘い、空想・行動を誘発するかたちが点在している状態が「風景に入る」条件の一つと考える。フィボナッチ数列から設定した一辺の長さがそれぞれ300,500,800,1300,2100,3400,5500,8900mmから成る立方体によって構成される空間の特徴を比較した結果、800,1300,2100,3400mmの立方体からなる空間は視点が固定化せず、図と地を行き来することで「風景に入る」ことを可能にすると感じた。

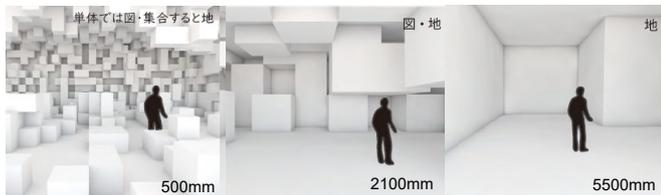


図7・8・9 立方体のスケールによる空間の変化

4-3 距離とスケール

4-2 では対象から近距離に立つ時の体験を比較した。しかし、実際には建築と人の距離は連続的に変化し、同じ

スケールで構成された空間も見る距離によって印象が異なる。そこで、対象からの距離を5,10,25,50,100mと変化させて4-1-2と同様の比較を行い、図8の結果を得た。

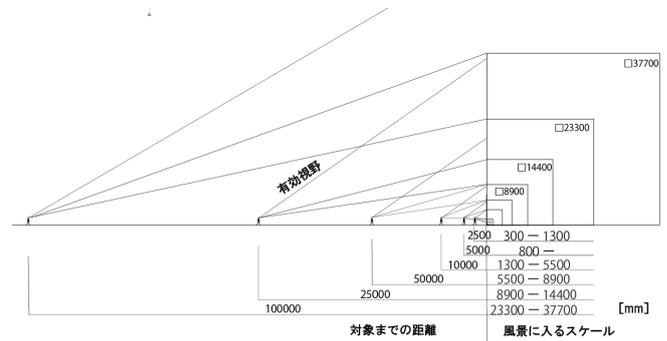


図8 対象までの距離と風景に入るスケール

5 敷地

設計敷地は、渋谷駅から徒歩5分、かつての東京都児童会館跡地を含む再開発予定地である。隣接する渋谷区役所旧第二美竹分庁舎及び渋谷区立美竹公園と一体的な共同開発が現在着手されている。設計敷地の西側は渋谷区の公園である美竹公園が立地し、野宿者の居場所となっているが、令和4年10月渋谷区によって閉鎖された。



図9 設計敷地配置図(東京都都市整備局HPをもとに作成)

6.設計提案

設計趣旨として、大人が風景の地と図を行き来しながら他者や様々な事物に自分を関係づけ、都市や建築という環境の中に自らを置くこと自体を経験する空間を提案する。設計手法として4-3で示した「風景に入るスケール」を用い、図1のように上層は敷地周辺から、下層は建築に近距離からの体験を想定して空間を構成してゆく。距離に応じてスケールを変えることで、街路を歩く人々や都市に対して風景に入る経験をもたらすと同時に、内部空間の体験としても連続的にその経験がつながってゆく。

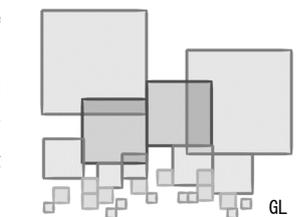


図10 断面ダイアグラム

主要参考文献

- 1.ダニエル・アムリン, ジャック・ヴォネッシュ (編), 芳賀 純・原田 耕平・岡野 雅雄訳, 『ピエジェ入門』, 三和書籍, 2021
- 2.草森紳一, 『子供の場所』, 晶文社, 1975
- 3.河合隼雄, 『子どもの宇宙』, 岩波書店, 1987